

ソフトウェアコミュニティのあるべき姿について ～SigSQA を通じて「つなぐ」を考える～

SEA SigSQA
sigsqa@sea.jp

三輪東 SCSK	井関武史 エクスジェンネットワークス	井芹洋輝 ASTER	伊藤潤平 ウィングアーク1st
大野泰代 RevComm	小笠原秀人 千葉工業大学	小島直毅 Adobe	後藤優斗 Accenture
滝田諭 パイオニアシステムテクノロジー	常盤香央里 グロース・アーキテクチャ&チームス	山本久仁朗 ビズリーチ	

要旨

本 Future Presentation では、「つなぐ」をテーマに議論を行います。ソフトウェアコミュニティとして、次世代へ技術継承していくことは大事な役割であると考えます。そのために、コミュニティにいかに関わりよく自主的に参加してもらえるかは成功の鍵の一つです。この参加してもらう、技術継承していくといった様々な「つなぐ」を可視化すれば、多様なコミュニティの発展にも寄与するものと考えました。SigSQA での活動を題材に、「つなぐ」についての議論を行います。

1. SEA SigSQA 活動について

我々の SEA SigSQA 活動は、「品質」を今の時代にマッチした捉え方をしようと 2018 年に始動しました。現在でもメンバーは増え、今では比較的若い人材で運営できているコミュニティです。先人から次世代への技術継承が出来ているコミュニティと言って良いでしょう。

この活動の基礎は、昨年 2023 年に急逝された西康晴氏(にしさん)が遺してくれたものです。振り返れば、彼の周りには「つなぐ」力が満ち溢れていました。それを引き継いだ我々は、今一度その「つなぐ」力に着目し、可視化する必要性を感じています。

2. ギバーの必要性

アダム・グラント著の『GIVE&TAKE「与える人」こそ成功する時代』[1]の中に、次のような記述があります。

成功するギバーは、「自己犠牲」ではなく、「他者志向

性」をもっている。他者志向性とは、たとえばチームで仕事をするとき、自分の取り分を心配するのではなく、みんなの幸せのために高い成果を出す、そこに目的を設定するということだ。(中略)要するに、自分がその仕事をせずにはおれないという“意義”がポイントだ。

「自分にとって意義あることをする」

「自分が楽しめることをする」

この条件が満たされればギバーは他人だけではなく、自分にも「与える」ことが出来る。

コミュニティ成功には、ギバーの多さが大事な要素になると考えます。そのためには、自然体で誰でもギバーになれることが、とても重要です。

SigSQA 活動には「イマドキの品質保証」という、非常に抽象度の高いテーマしかありません。毎回、話すテーマも変わっていきます。実務での悩み相談も多数です。

愚痴っぽい相談事は、第三者にはあまり面白くありません。しかし、ここでの悩み事はそうではなく、他のメンバーの貴重な情報源になっています。アドバイザーがギバーであることは当然ながら、相談者も実はギバーとなっている構造があります。それを実現しているのは多様性であり、このことがコミュニティを活性化し、継続させる原動力となっています。

3. 多様性の確保

多様性に貢献している重要な要素として、以下の 4 つがあると考えます。これらについて、みなさまと議論を行います。

- ① 抽象度の高い活動テーマ設定
- ② 知らない・分からないを歓迎する雰囲気づくり
- ③ ギバースパイラルを創出する定期的な外部発表
- ④ 駆け込み寺要素の確保

3-①. 抽象度の高い活動テーマ設定

前述の通り「イマドキの品質保証」という抽象度の高いテーマ設定で運営しています。具体性に乏しい分「結局、何がやりたいの?」と外部の方々から問われることも多いです。ですが、この抽象度の高さゆえに、実務で Agile 開発メインの方、Waterfall メインの方、SIの方、製品づくりの方など、多様なメンバーを集めることに成功しています。かつ、様々な業種を交えて品質の議論をすることで、手法にとらわれない共通の価値を抽出できると感じています。結果、どの業種でも共通に使えるものとして誕生したものが QA ファンネル[2]や QM ファンネル[2]などです。

3-②. 知らない・分からないを歓迎する雰囲気づくり

多数の書籍などもありますので、今更の議論は不要かもしれません。しかしながら、にしさんのエピソードを添えながら考察してみたいと思います。

本 SigSQA には、経験豊富なメンバーから、QA とは何かも知らないまま突然 QA 担当となった初心者メンバーまで多様な人材が集っています。その中で、にしさんはレジェンドであったことは間違いありません。しかしながら、彼のスタンスはいつも素人でした。「昔のことは良く知っているけど、イマドキの現場はイマドキの人に聴かない」という姿勢を前面に出しながら対話を楽しんでいました。アドバイスを交えつつも「なるほど、今はそのような感じなのだね」と純粋に学んでいる姿勢が今でも脳裏に焼き付いています。他の事例も含めて、議論を深めていきます。

3-③. ギバースパイラルを創出する定期的な外部発表

所属メンバーがギバーであり続けるためには、所属コミュニティで自身の成長を実感できることが大事な要素と考えています。そのために、野心的なテーマを選定し、発表に挑むスタイルを継続しています。具体的には、今確実に発表できるテーマを定めることはせず、我々として議論したいことをテーマ設定し、発表までに全員で何とかかたちにする、を繰り返しています。参加者のみなさまの工夫も共有しながら、議論を深めます。

3-④. 駆け込み寺要素の確保

長期間コミュニティで活動していくと、当時斬新に感じ

たテーマに飽きてしまい、参加をためらってしまうこともあるかと思います。それを防止するのに、各自の現場の駆け込み寺的な機能をコミュニティが維持していることが大事な要素と考えています。

参加者全員、職場で経験を積みながら、新たな悩みを抱え、相談相手を探しています。その相談に答えるには、現存する多数の知見が役に立ってきました。イマドキではなく旧式の知見です。例えば、飯塚悦功著の「現代品質管理総論」[3]のような内容です。

その知見に目新しさは無くても、次世代には新鮮に感じられるものが多数あります。最近では多数のソフトウェア企業、とりわけベンチャー企業も多く存在します。品質を自ら作り込んできた歴史ある企業は自身の組織に品質の考え方や道具が揃っていますが、新興企業では品質を知る個人が組織に品質をインストールすることも多い時代です。そのような組織に属する方々からすれば、先人の話題はととても役立ちます。この技術継承を、先人がゼロから惜しみなく教え、対話の中で先人がイマドキの事象を情報として獲得し、新たな課題認識を得る。こういった循環を生み出していくことで、コミュニティが次世代の駆け込み寺となり、現世代の糧になっていくという良きスパイラルが生まれていきます。実際に、QA ファンネル[2]や QM ファンネル[2]は、こういった良い循環の中で生まれたものです。これらは、温故知新の一つのかたちであると捉えています。このような、次世代への技術継承の手段としてのコミュニティ、駆け込み寺という視点で、議論を深めたいと思います。

4. 技術継承とコミュニティの関係性

SigSQA は、何かの技術継承をするために始まったコミュニティではありません。参加者が探求したいテーマとして「イマドキの品質保証」を定め、各参加者の「イマ」の話題を幅広く募り、その話題に対して悩み教えあい、知恵を出し合うことを目的としています。多様性から様々な視点の疑問や意見、事例や解などが出ることで、一つの話題が多の話題に発展し、発散と収束を繰り返していきます。一つの話題が多方面の視点から様々な議論に晒されていく過程でも、本質は残っていきます。多様なメンバーがそれぞれの視点で見ても意味・意義ある状態で、それぞれが活用できる状態になります。いわば汎化です。この汎化は技術継承にとっても役立ちます。

人から人への技術継承の難しさの一つに、与える側と受け取る側の能力が異なる中で継承せざるを得ない状況が考えられます。これを克服するために、与える側の

技能を個別技術に汎化し、受け取り側は汎化した技術を受け取る個人の特性に従って再構築して技術を獲得する必要があります。この汎化が無いと、受け渡しは非常に難しくなります。

同じ組織の中で汎化するよりも、コミュニティの多様性の中で汎化する方が、多数の意見や視点が出やすいことから汎化しやすいのではないのでしょうか。この点を、議論していきます。

5. まとめ

気が付けば、SigSQA には様々な「つなぐ」しくみが自然体で出来上がっていました。これらを共有・議論することで、他のコミュニティ運営のヒントになると考えます。良き問いから生まれる汎化、その汎化を獲得し自身で再構築することで新たな智を生み出していく。みなさまとの議論を通じて、この「つなぐ」を考える Future Presentation にしていきます。

参考文献

- [1] GIVE&TAKE「与える人」こそ成功する時代, アダム・グラント, 訳者: 楠木建誠, 株式会社三笠書房, ISBN978-4-8379-5746-1 C0030
- [2] 品質を加速させるために、テスターを増やす前から考えるべき QM ファンネルの話(3D 版), 西康晴, <https://www.slideshare.net/YasuharuNishi/quality-management-funnel-3d-how-to-organize-qarelated-roles-and-specialties>, アクセス日時 2024 年 3 月 24 日 18:00
- [3] 現代品質管理総論 (シリーズ〈現代の品質管理〉1), 飯塚悦功, 朝倉書店, ISBN 978-4254275667